

大項目	2	持続可能な社会の実現に向けた地球的課題と国際協力			
中項目	2-1	生活文化の多様性と国際理解			
小項目	2-1-1	文化・人種・民族と現代社会			
細項目 (発問)	2-1-1-5 多文化主義	世界的な難民の爆発的な増大により、多文化主義は失敗に終わったのですか。			
作成者名	杉本良男	作成・修正年	2021/2023/2024年	Ver.	1.2
キーワード	多文化主義、カナダ、オーストラリア、アメリカ、サラダボウル				

### 発問の意図と説明

#### 1. 現在の多文化主義の現状と課題について考えてみよう

ドイツのメルケル首相（当時）は 2010 年に、「ドイツにおいて多文化社会をつくらうとした試みは完全に失敗した」と述べて世界に大きな衝撃を与えました。人びとが協力し合って幸せに暮らすという考えはうまくいかず、移民はドイツ語を話すような努力をして社会に統合されるべきだと述べたのです。このころドイツではトルコやアラブ世界からの移民が増えて、国内に反移民感情が高まっており、社会全体を脅かしていると考えられていました。その翌年にもイギリスのキャメロン首相がやはり多文化主義の失敗を宣言しました。メルケル首相は、2016 年にも多文化主義は偽りであるが、しかし難民は受け入れると述べました。このころシリア難民が大挙してヨーロッパに入り、各国はその対応に苦勞していました。イギリスの EU 離脱の大きな要因は、この難民の流入への対処の仕方での方向性の違いがあったと言われていました。そのうち、メルケル首相の演説の「ドイツでは」は省略され、「多文化主義」そのものを失敗ととらえられる風潮にもなりました。多文化主義の成功例とされてきたカナダ、オーストラリア、それに多文化主義を国是にはしていないものの、文化多元主義を貫いてきたアメリカなどは、ヨーロッパと同じように失敗したのでしょうか。この項では、多文化主義の現状と課題について考えてみます。

#### 2. 国民国家理念と多文化状況について学ぶ

多文化主義の前提となるのはヨーロッパでイギリス市民革命とフランス革命を経て確立した「国民国家」理念です。その後ドイツ、イタリア、さらには第二次大戦後の旧植民地の独立によって、国民国家体制が世界をおおようになりました。この国民国家体制は、一定の領域内での文化的・民族的同質性を基盤とした一国家一国民が原則で、少数者には主流民族の言語、文化への同化が求められました。多くの異なる民族を含む地域や、移民を受け入れてきた地域では、主流の文化、言語への同化を強制されたところもありました。その結果、先住民族や少数者の主体性と自律性は奪われ、社会的にも文化的にも周縁に追いやられることになりました。19 世紀にイギリスからの移民国家として国家建設を行ってきたアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどでは、いずれも強力な同化政策がとられ、とくに先住民の文化や伝統を根絶やしにするような方策がそれぞれにとられました。こうした強硬な同化政策の反省から、多文化主義が興ってきました。

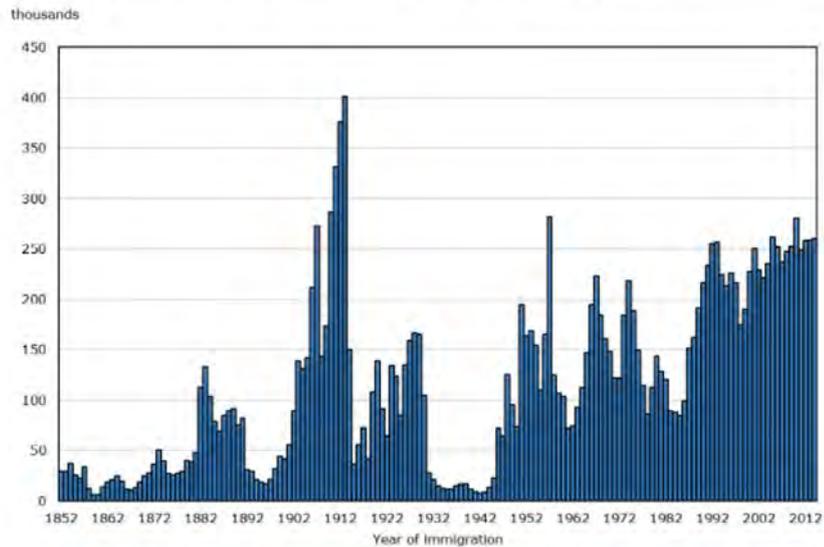
アメリカでの公民権運動、アジアやアフリカにおける旧植民地の相次ぐ独立などによって、異なる文化伝統を対等に尊重するという考え方は広く受け入れられるようになりました。文化人類学ではこれを文化相対主義とよんで、欧米中心的な考え方への強い批判として、その基本的な認識としていました。第二次大戦後に創設された国連は、基本的に少数者保護を原則としていましたが、1948 年の国連での世界人権宣言では、その権利規定が明確にはうたわれませんでした。その後、ジェノサイド防止条約で、国民的、人種的、民族的、宗教的な少数者の生存権の保護が図られ、最終的には 1992 年の「少数者権利宣言」によってその立場が明確にされました。

#### 3. カナダの二言語多文化主義とはどのようなものなのでしょうか。

多文化主義という言葉が初めて使われたのは 1960 年代半ばでしたが、最初にそれを国策としたのはカナダでした。カナダは 1867 年に連邦制をとって建国されましたが、それ以前は、先住民族（インディアン）のあとにまずフランス人が、そのあとイギリス人が定住をはじめました。カナダでは、フランス系とイギリス系の移民がほぼ拮抗していたことが今日の二民族、二言語体制の基盤となりました。そのほかの人びとも定住していましたが、人口の 1 割にも満たず、建国への影響力は持っていませんでした。カナダではその後の移民がふえて人口構成はますます多様化し、フランス系、イギリス系あわせても約三分の一を占めるにすぎません。**図 1、図 2**

## 図と表のページ

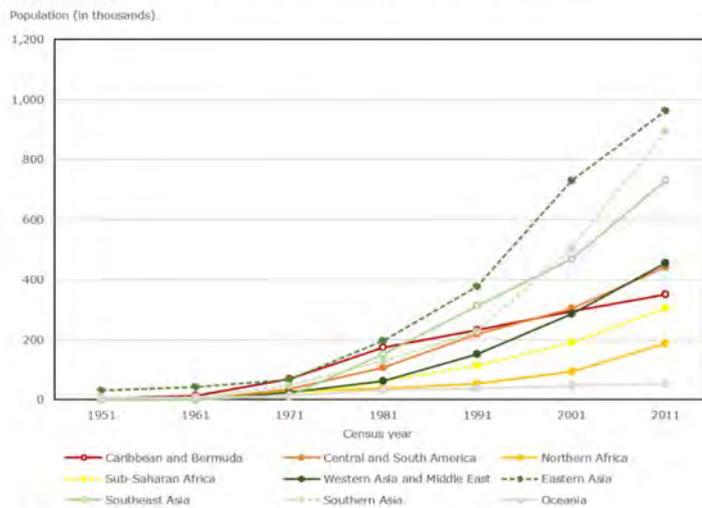
**Chart 1**  
**Number of immigrants who landed annually in Canada, 1852 to 2014**



**Sources:** From 1852 to 1979—Employment and Immigration Canada, 1982. For 1980—Immigration Statistics, Immigration and Demographic Policy Group, Catalogue no. MP22-1/1980. From 1980 to 2014—Immigration Refugees Citizenship Canada.

図1 カナダ連邦結成以来の移民受け入れ人数の推移 (150years of immigration in Canada より引用)  
<https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/11-630-x/11-630-x2016006-eng.htm#archived>  
 現在、このサイトは見れません。(2024年3月)

**Chart 4**  
**Foreign-born population in Canada, by selected regions of birth, 1951 to 2011**



**Sources:** Statistics Canada, censuses of population, 1951 to 2001. National Household Survey, 2011.

図2 出生国別移民数の推移(1951-2011) (150years of immigration in Canada より引用)  
<https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/11-630-x/11-630-x2016006-eng.htm#archived>  
 2024年3月現在、このサイトは、見えなくなっています。

カナダははじめ、先住民の児童に同化教育を行うためにインディアン寄宿学校を設立するなど、同化政策が強力に進められました。しかし、1960年代になると英語のほかにフランス文化、フランス語とフランス系の人びとの権利を認める二言語二文化という方針があらわれました。そして、1971年10月の当時のトルドー首相による議会演説が実質的な多文化主義宣言でした。ただ、フランス系、イギリス系両者の対立は現在も続いていて、フランス語圏の中心であるケベック州では1960年代から強力な独立志向が今も見られます。また、先住民の間からは、カナダは二国民だけで構成されているのではないとして、抗議の声も上がりました。その結果、カナダは二言語多文化主義がとられることになり、1988年に「多文化主義法」が制定されて、法的に多文化主義をうたう世界で唯一の国になりました。それは「一国家一国民」を原則とする近代国民国家のあり方を根本から覆すものでした。

### 3. オーストラリアの多文化主義の功罪はどのようなものでしょうか。

カナダの「多文化主義法」制定の翌1989年にオーストラリアでは「多文化国家オーストラリアのための全国計画」が施行されました。オーストラリアは、1788年にイギリスの植民が始まったころには、アボリジニ（アボリジナル）とよばれる先住民が50万人程度の人口をもち、言語の異なる約600の地域集団にわかれていたと推定されています。イギリスはオーストラリア大陸の東半分の領有を主張し、1788年から流刑者を移住、定着させました。その結果南部では先住民の土地が奪われ、殺害されたり、病気などによって多くの人びとが亡くなったり、混血も進んで、自律的な生活は失われました。先住民はキリスト教ミッションが管理する居留地に残るか、白人の下で働くか、都市のスラムで暮らすかの絶望的な選択を迫られました。19世紀後半になると人道主義的気運が高まり、先住民の保護がもとめられました。しかしそれは、保護区を設けて混血の子どもを親から引き離して「人種の浄化」を目指す同化教育で、1869年から1970年まで100年あまりつづけられました。

この時代、先住民は白人にとっては劣等であり過去の存在にはかならなりました。1901年にイギリスから独立を果たすと、同化可能な移民のみを受け入れる「白豪主義」政策がとられました。1960年代に入ると、世界的な少数者保護の流れのなかで、先住民権利運動が高まりました。その結果1967年には憲法から先住民への差別条項が撤廃され、1972年には白豪主義が終わり、1973年に多文化主義宣言が行われました。1975年には人種差別禁止法が成立し、1976年にはアボリジニ土地権法によって北部での土地権が認められ、アボリジニ省が設立されるなどの政策がつつぎと実行されました。1980年代に入ると同化政策の対象になった人びとは「盗まれた世代」とよばれて社会問題になり、1997年に「家庭に戻そう」という動きにもつながりました。そして、2008年にはときの首相が盗まれた世代への謝罪スピーチをおこないました。

このような一連の動きの基礎になっているのは、異なる文化を尊重し、対等に遇する、という考え方で、これは世界的に多文化主義が進むなかで、先進的な役割を果たしています。もちろん、先住民アボリジニに対する偏見や否定的な感情は急にはなくなりません。平均寿命を初めとして、あらゆる社会的指数もオーストラリアの平均を大きく下回っています。成人病、若者の非就学、非行、家庭内暴力、飲酒、麻薬、自殺などの社会問題が山積しているほか、社会福祉への高い依存率なども大きな問題です。しかし、とくに2000年代に入ると、世界的なナショナリズムの高まりとともに、移民排斥の動きが出てきています。オーストラリアは、多文化主義の先進国ですが、それだけに多文化主義そのものが持つ問題点も鮮明にあらわれているのです。図3はオーストラリアの外国生まれ住民の出身国を示しています。

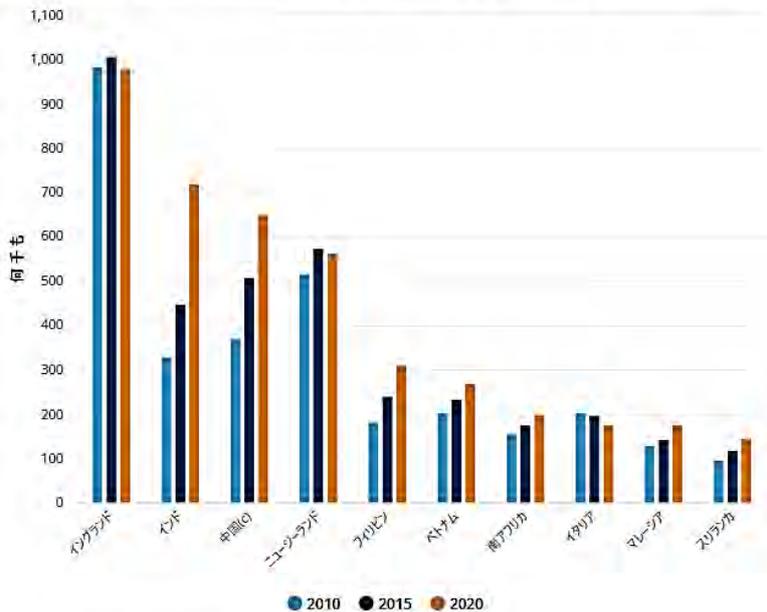
### 4. 多文化主義に何を学ぶのか。

カナダの南隣のアメリカは、多文化主義を明確にはうたっていませんが、1910年代から文化多元主義の考え方がおこなわれるようになっていました。そして、さまざまな民族、集団がゆるやかに集住して、民族ごとに分立するようになりました。アメリカの都市部は多様な野菜が盛られたサラダ鉢のようなものだと、「人種のサラダボウル」とよばれるようになりました。さまざまな人びとが無理に融合しようとするのではなく、他者の異なる文化を尊重し合い、共生しようとする思想が根本にあります。

先進的な移民国家における多文化主義の例を見ましたが、日本の状況はどうでしょうか。日本には歴史的に、在日外国人のオールドカマーといわれる韓国朝鮮人と中国人が定住していました。これらの人びとは、植民地支配を背景にして、強力な同化の圧力を受けつづけてきました。1970年代以降になって、東アジア、南米を中心にニューカマーが加わるようになり、さらに1995年に起こった阪神淡路大震災をきっかけに、多文化共生の必

図と表のページ

グラフ1.3 2010年、2015年、2020年6月30日時点の海外生まれ-出生上位10カ国、オーストラリア-(a)(b)



図を参照しました。

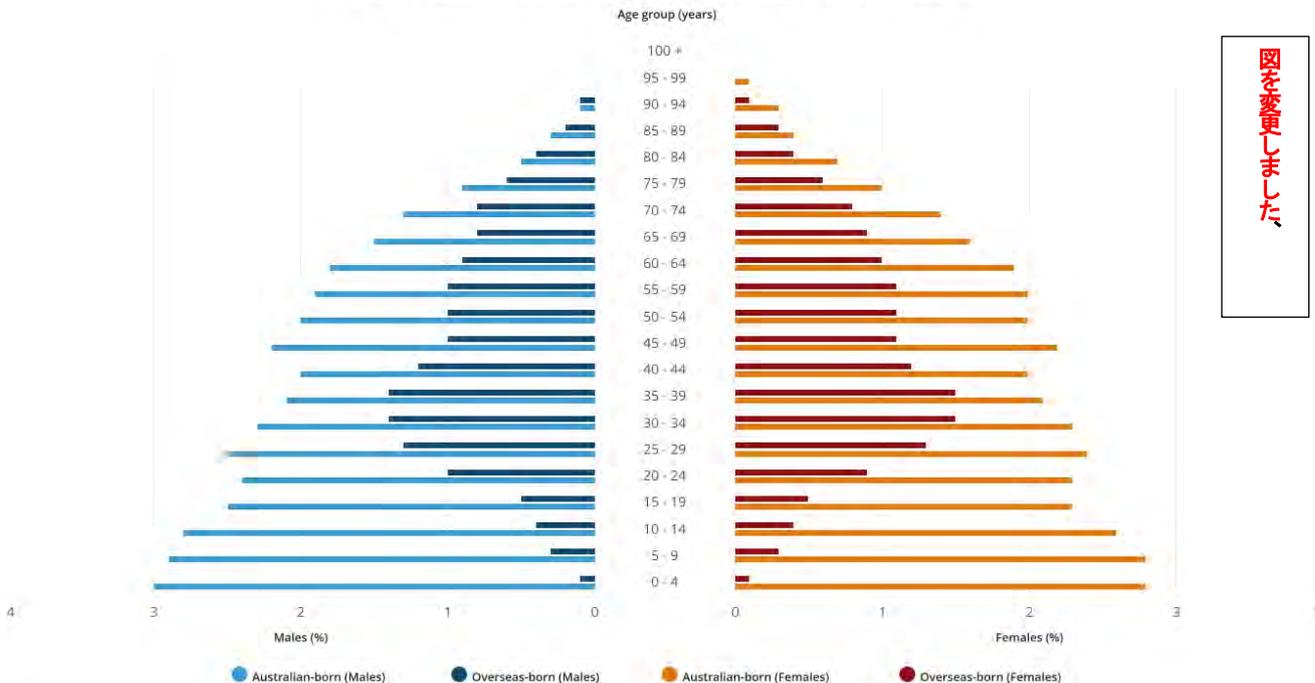
- a. 2020年6月30日現在の海外生まれの出生国トップ10。
- b. 2020年の人口推計は暫定的なものであり、方法論のパラグラフ9のERPステータスを参照してください。
- c. 特別行政区と台湾を除く。

年齢・性別別の出生国

図3 オーストラリアの年齢・性別の出生国 2010年 2015年 2020年

<https://www.abs.gov.au/statistics/people/population/migration-australia/latest-release> より引用

Graph 1.4 Population structures for Australian-born and overseas-born - at 30 June 2020(a)(b)



図を参照しました。

Source: Australian Bureau of Statistics, Migration, オーストラリア 2019-20 financial year

図4 オーストラリア生まれ(青)と海外生まれ(赤)に人口ピラミッド

<https://www.abs.gov.au/statistics/people/population/migration-australia/latest-release> より引用

要性が広く強く認識されるようになりました。ただ、日本における多文化共生は、他文化強制だ、などといわれるように、日本文化への強硬な同化政策の域を出ていません。

一方、多文化主義に対する批判は、どこの国でもつねにありますし、最近のヨーロッパ諸国における EU 域内での移民の問題は、多文化主義の限界を示す例として見直す材料にもなっています。もっとも基本的な批判として、多文化主義の基礎となる文化相対主義という考え方が、個別の文化を絶対視するような傾向に結びついていることへの批判です。つまり、少数者といってもその内実は多様なはずで、インディアン文化、アボリジニ文化、などとして均質化され、少数者のなかのさらに少数者の同化に結びつくような危険をつねにはらんでいます。その意味では、どのようなレベルであっても、文化を固定的にとらえるのではなく、むしろ流動的なものであると認識することが重要です。ただ、人間はどうしてもものごとを固定的に考える傾向があるので、これは言うは易く行うは難しですが、つねに心すべき姿勢なのです。

また、多文化主義の先進国はいずれも大英帝国の旧植民地だった国々です。カナダでのイギリス系とフランス系の対立からきた二言語二民族主義が先住民から批判を浴び、またオーストラリアでは先住民アボリジニーにふれられてはいますが、いずれも「保護」の対象であって、対等の立場とは認められていない面があります。さらに、多文化主義には、女性差別やジェンダーの問題が隠されているという批判もあります。「多文化主義」は、グローバル化の加速と難民の増大などによって、大きな危機を迎えています。これら先進国の例から学ぶだけでなく、地域の特性を考慮に入れた新たな構想が必要な時期に来ているのです。

#### 参照 URL(2024 年 3 月参照確認)

参照 URL 1 カナダ国勢調査より 150 年間の移民の分析

<https://www150.statcan.gc.ca/n1/pub/11-630-x/11-630-x2016006-eng.htm#archived>

参照 URL 2 オーストラリア国勢調査より移民

<https://www.abs.gov.au/statistics/people/population/migration-australia/latest-release>

**参考文献**(論文等の URL は、J-STAGE:日本の学術ジャーナルを発信するオンラインプラットフォームです。最近の論文以外はダウンロードできます。(無料)。検索サイトは <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>

宮島 喬 「「多文化共生」の問題と課題—日本と西欧を視野に」『学術の動向』2009. 12

[https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/14/12/14\\_12\\_12\\_10/pdf/-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/14/12/14_12_12_10/pdf/-char/ja)

西川長夫、渡辺公三、ガバン・マコーマック (編)『多文化主義・多言語主義の現在—カナダ・オーストラリア・そして日本』人文書院、1997

国立民族学博物館編『世界民族百科事典』、丸善出版、2014

日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善出版、2009

加藤普章『カナダの多文化主義と移民統合』東京大学出版会、2018

関根政美・塩原良和・栗田梨津子・藤田智子 (編)『オーストラリア多文化社会論：移民・難民・先住民との共生をめざして』法律文化社、2020

窪田幸子・野林厚志編『「先住民」とはだれか』世界思想社、2009

川口幸大『ようこそ文化人類学へ—異文化をフィールドワークする君たちへ』昭和堂、2017